

平成28年度 学校経営計画に対する最終評価報告書

重点目標	具体的取組	達成度判断基準	集計結果	分析(成果と課題)及び後期の取組
1 上位層への刺激とともに中間層の底上げを図るため、教員間の学び合いを進めるとともにICT機器の活用や反転学習、アクティブ・ラーニングなどにより生徒が主体的・協働的に学ぶ授業づくりを目指し論理的思考力及び発言力の育成に努める。	① アクティブ・ラーニングやディスカッションを授業の中に導入するなど、授業の工夫を図っている。	アクティブ・ラーニングやディスカッションにより学習効果が高まると感じている生徒が、 A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	ア 実感している 18.7% イ やや実感している 46.3% ウ あまり実感していない 25.8% エ 実感していない 6.7% ア+イ 前期66.9%→後期65.0%	アクティブラーニング（AL）やディスカッションについて、一定の学習効果を感じている生徒が見られる。前期より後期の数値が若干少なくなっているのは生徒の慣れによることもあると考えられる。来年度に向けてさらなる取り組みをしていきたい。
	② 授業の中で生徒が自分の考えを述べる場面、論理的思考力を育成する場面、教師と生徒とのやりとりの場面を設定している。	日々の授業において、考える必要のある質問をし、生徒が発表(発言)する場面 A 多く設定している B 時々設定している C あまり設定しない D 全く設定しない	ア 多く設定している 40.0% イ 時々設定している 52.7% ウ あまり設定しない 5.5% エ 全く設定しない 0.8% ア+イ 前期90.9%→後期92.7%	ほとんどの教員が思考を要する発問を工夫している。昨年度の92.0%より0.7ポイント上昇している。今後も思考力、判断力さらに表現力を育てる指導をより効果的に取り入れるべく努力していきたい。
	③ 家庭学習と授業内容の連動を図り、学習習慣の確立と学習内容の質の向上をめざす。	1,2年生で平日の平均家庭学習時間が120分以上である生徒が、 A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	【1年】 前期 64.7% C評価 後期 50.6% D評価 【2年】 前期 50.0% D評価 後期 53.7% D評価	昨年度は1年生(38.7% D評価)、2年生(後期65.9% C評価)であった。現在の2年生は昨年度と比較して家庭学習時間を伸ばしているが、1、2年ともに来年度に向けて家庭学習の習慣化をより一層指導していきたい。
	④ 朝学習の充実により、学びにむかう主体性を身につけ、学びの質を高める。	朝学習で学力や教養が身についたと考える生徒の割合が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	【1年】 【2年】 【3年】 ①よくあてはまる 16.0% 19.8% 28.8% ②ややあてはまる 53.8% 58.2% 50.0% ①+② 69.8% 78.0% 78.8% 評 価 C B B	【1年】 後期はリスニングと数学小テストを行った。リスニングでは集中して聞く姿勢ができ、英文を聞くことに少しずつ慣れてきている。一方、長文には慣れておらず、摸試等で対処できないと感じる生徒が多い。数学は週末課題の確認のテスト→学習会のサイクルでおこない、摸試レベルを見れば、全体の学力は底上げされた。 【2年】 授業→朝学習（小テスト）→再テスト（補講）→考查という学習習慣がうまく確立され、授業内容の確認、弱点克服につながっている。しかし、教科によっては不合格者が多く、内容を理解しないままテストを受ける生徒が見られる。 【3年】 B評価であるが、もう少しでA評価であった。強化が必要な科目に重点を置いてテストや課題等を実施できたと考える。
学校関係者評価委員会の評価	<ul style="list-style-type: none"> 多くの授業でICT機器を活用し丁寧な説明がなされており、わかりやすい授業になっているが、「わかる授業」と「力がつく授業」は違う。 理由を考える力をつけさせ、予習が必要となる授業、自ら学ぶ授業形態が必要 			
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方策	<ul style="list-style-type: none"> まず書くことで自分の考えを整理し、グループ協議を通じて論点を絞って考えを深める力を育成する。 ディスカッションの機会を増やしアクティブ・ラーニングや反転学習を推進する。 			

重点目標	具体的取組	達成度判断基準	集計結果	分析(成果と課題)及び後期の取組	
2 個別面談や学習活動を通したきめ細かな指導により、生徒一人ひとりの可能性を引き出し、早期に高い進路目標を持たせ、進路実現に向けての意欲と主体性を育む。	① クラス全体の指導やきめ細かい個人面談などを通し、生徒の進路意識を高め、設定した進路目標を実現するために自ら能動的に学習し、学力を高める努力をするような意識づけを行う。	(1・2年)9月の進路志望調査で、国公立大学を目標とする生徒が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 60%以上 (3年)9月の進路志望調査で、金沢大学以上を目標とする生徒が A 80人以上 B 60人以上 C 40人以上 D 40人未満	【1年】 82.5% B評価 【2年】 75.9% C評価 【3年】 79名 B評価	現3年の1年時より行っている、高い志望を掲げ学習に能動的に取り組む方策が奏功し、全学年で高い数値となっている。特に3年ではほぼA評価に近い数値となっており、高い志を掲げ、能動的に学習に取り組む生徒の割合が確実に増加している。	
	② 進路指導課から各学年、教科に方針を発信することにより、教員全体の相互理解を深め、生徒の進路志望を実現するための学力向上の取組を組織的に行う。	1,2年生の学力試験で各教科の全国偏差値が A 平均偏差値50以上 B 平均偏差値48以上 C 平均偏差値45以上 D 平均偏差値45未満	11進研模試による ()内は前年同時期 【1年】 国語B 数学C 英語C 国語 48.0(46.1) 数学 47.5(49.7) 英語 45.0(46.3) 【2年】 国語B 数学C 英語C 国語 48.2(50.9) 数学 47.8(48.0) 英語 47.0(48.0)		1年は、全教科で7月結果比で数値を向上させたが、前年比では年度当初より高い国語を除き数値を減じた。2年は、昨年度の2年生が高い数値を誇ったため、前年比で全科目が数値を減じたが、7月比では全科目が向上しており、両学年とも全成績層の生徒への学力向上のための取組を継続中である。
		1,2年生の英数国の学力試験全国偏差値54以上の生徒が A 55人以上 B 45人以上 C 40人以上 D 40人未満	11月進研模試による 【1年】 20名 D評価 【2年】 43名 C評価		1年は、中下位とともに上位者育成にも注力し、7月模試の12名から8名増加した。2年は、7月模試の38名から5名増加して43名となった。受験記述力の指標となる文系国数英でも33名、理系数理英では14名、計47名となる。
		金沢大学以上の国公立大学合格者数が A 15人以上 B 10人以上 C 5人以上 D 5人未満	金沢大学以上の国公立大学合格者 14名 B評価 北海道大1、東北大1、名古屋大1、千葉大1、東京学芸大1、電気通信大1、金沢大8		記述力を高める取組を継続して行った結果、2次試験の比重が高い難関大学に対応できる学力が養成され、創立34年、卒業32期で最高となる旧帝国大学3名合格をはじめとして14名が合格した。
		国公立大学合格者数が A 70人以上 B 65人以上 C 55人以上 D 50人以上	国公立大学合格者 74名 A評価		推薦を含む入試機会を幅広く活用、後期試験まで粘り強く受験し、またセンター試験とあわせて2次試験にも対応できる学力を養成できたことにより、創立以来最高となる74名と同数、かつ現役では創立初である69名が合格した。
	難関私立大学合格者数が A 20人以上 B 15人以上 C 10人以上 D 10人未満	難関私立大学合格者 22名 A評価 明治大1、青山学院大1、法政大3、立命館大10、関西大7		私立大学専願者に対するきめ細かな受験指導と高い志の涵養により、難関私立大学に22名が合格した。	
学校関係者評価委員会の評価		・生徒の発達段階や事前の学びの状況を把握し、わかりやすく、力の付く授業展開をすることで進路結果につなげてほしい。 ・早い段階からの進路に向けた意識づけが必要			
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方策		・アクティブ・ラーニングの手法も活用し、論理的思考力や批判的思考力を身につけ、小論・面接や2次対策などを推進する。			

重点目標	具体的取組	達成度判断基準	集計結果	分析(成果と課題)及び後期の取組
3 部活動や生徒会活動の活性化とともに地域行事への積極的参加に努め、チャレンジ精神の涵養を図り、明るく活力ある学校づくりを推進する。	① 保護者に「朝の挨拶運動」を始めとしたPTA活動等に積極的に参加してもらい、教育活動をバックアップしてもらおう。	学校行事やPTA活動で保護者が来校した回数の平均が A 5回以上 B 4回以上 C 3回以上 D 2回以下	A+Bが29.9%で目標の50%には達していない。	挨拶運動への参加保護者数が全生徒の59.1%であることから考え、年2回の保護者懇談を加味すると、学校行事、PTA行事への参加呼びかけに工夫が必要である。学校公開時に魅力あるイベントを行いたい。
	② 本校の教育活動、生徒の活動の成果をホームページ上に掲載し、広く情報を発信する。	ホームページ上の更新回数が A 15回以上 B 12回以上 C 10回以上 D 8回以下	更新回数はA15回をはるかに上回り、50回以上である。	行事予定等の更新を早めに行う。学校新聞の記事以外に、行事によって担当部署から記事や写真を提出してもらい、速報性を生かしたトップページの活用を考えたい。
	③ 部活動の加入を促し、学校全体の活性化を図る。生徒のチャレンジ精神と部活動の実力向上を目指す。	1,2年生の部活動の加入率が A 90%以上 B 85%以上 C 83%以上 D 83%未満	5月末では、90%以上であったが、中途退部等もあるため、9月末で加入状況を再調査。部活動に熱心に取り組んでいると答えた生徒が約87%。外部諸団体の活動者を含めると90%には届くと思われる。	様々な状況の中で、中途退部者が10%弱発生している。各顧問と協力し、中途退部者防止策や生徒に対して他の部への再入部の支援体制を行う必要がある。
	④ 明倫祭の外部公開を継続し、校内開催と校外開催についての内容を検討し、本校の外部に対する情報発信力を高める。	1日目の来場者数が A 900名以上 B 700名以上 C 500名以上 D 400名未満	明倫祭1日目は、632名でC評価 2日目は417名で合計1047名。	土日開催ということで、日曜日の県立音楽堂への保護者を中心とした来場者が100名程度増加した。一方で土曜日に本校で開催した1日目は来場者が100名程度減少した。1日目減少の要因は、土曜日ということと、今回より校地内での駐車をご遠慮願ったことにあると考えられる。
	⑤ 図書委員会による本の読み聞かせや本の紹介カードの作成・展示、公立図書館からの本の借り受けなど地域と連携した活動を行うことで生徒のチャレンジ精神の涵養を図る。	地域と連携した図書委員会活動の回数が A 年間10回以上 B 年間8～9回 C 年間6～7回 D 年間6回未満	地域と連携した図書委員会活動の回数 年間10回 A評価	「絵本の読み聞かせ」は8月に2回、富陽小学校放課後子ども教室の児童とつばき保育園の園児を対象に行った。この活動に先立ち7月に野々市市立図書館が主催する「図書館ボランティア講座」に1回参加した。生徒が委員会活動で作成したPOPの展示を市立図書館で11月11日～12月4日行った。また県立図書館から4回、市立図書館から2回の学校図書館支援サービスを活用し、特集企画の展示に役立てた。
学校関係者評価委員会の評価	<ul style="list-style-type: none"> 授業態度は良好であるが、ロッカーがないこともあり床にカバンなどが置いてある状態が気になった。 ホームページの更新は増えているが、行事予定などのメール配信を早期に行ってほしい。 			
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方策	<ul style="list-style-type: none"> 授業規律の確立を徹底し、ホームページの更新をさらに進め、行事予定の配信を早める。 			

重点目標	具体的取組	達成度判断基準	集計結果	分析(成果と課題)及び後期の取組
4 節度ある生活習慣の確立に努め、自ら挨拶し、読書に親しみ、ボランティア活動等にも積極的に参加する豊かな人材の育成を図る。	① 登校指導や生活指導などを通して、挨拶がしっかりできる人間の育成を図る。	生徒同士や教職員、外部からの来客に対し、挨拶を自分からすすんでしっかりとできた生徒が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	生徒同士や教職員、外部からの来客に対し、挨拶を自分からすすんでしっかりとできた生徒が69.6%で判定C評価であった。	学年別では、3年生が74.2%と最も多かったが、この傾向は例年である。学年が進行するにつれて進路実現に向けての意識向上や自我が確立され社会性が向上した証かもしれない。1.2年生において早いうちから進路目標の設定や社会性を育成する指導を取り入れることが数値向上につながると考えられる。
	② 登校指導や生活指導などを通して、自ら身なりを正すことを通じて、規範意識を育成する。	制服を意識的に正しく整えている。 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	64.9%の生徒が『よくあてはまる』と回答し、30.7%の生徒が『やや当てはまる』と回答した。生徒の服装容儀に係る規範意識は高いことがうかがえる。	生徒の規範意識は高いが、中には頭髪や制服の変形着用をしているものがみられる。ごく一部の生徒ではあるので、全職員共通見解のもと指導を徹底したい。
	③ 交通安全教室や街頭指導を通して、自転車の安全運転の励行を図る。	交通ルール(自転車の二人乗りや携帯電話を操作しながら等の運転をしない)を遵守している生徒が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	72.0%の生徒が『よくあてはまる』と回答し、23.1%の生徒が『やや当てはまる』と回答した。交通ルールに対する規範意識は高い。	交通ルールに対する規範意識は高いことが生徒の意識調査からうかがえるが、石川県警の報告によれば、本校生徒の自転車指導件数は県内で最も多い。規範意識自体は高いが、並列走行などに違反意識が薄く、指導件数を上げている。細かな指導と啓発活動が急務である。
	④ 学校内外のボランティア活動への自発的な参加を促すとともに、ボランティアに参加したことの達成感や地域貢献への意識を高める。	ボランティア活動に、 A 自発的に複数回参加した B 自発的に参加した C 参加した D 参加しなかった	14.4%の生徒が『自発的に参加した』と回答し、32.1%の生徒が『参加した』と回答した。	『ボランティア活動に参加しなかった』と答えた生徒は全体で53.2%。3年生では67.2%とここ数年で最も多い。野々市の市への参加が、主催者側の要望で縮小したことや、全校で取り組んでいる校外清掃などをボランティアと認識していない生徒が多いようである。
	⑤ 生徒の良好な人間関係作りを支援する。	学校生活が楽しいと感じる生徒が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	学校生活が楽しいと感じる ア よく当てはまる 43.0% イ やや当てはまる 39.7% アとイの合計で 82.7% B判定	多くの生徒は学校生活を楽しいと感じており、安定した学校生活を送っているといえる。しかし、前期に比較して楽しいと感じる生徒が5%減少しており、後期に向かって息苦しさをを感じる生徒が増加している。コミュニケーション能力の育成、居場所作りなど、さらに工夫の必要がある。
	⑥ 情報の収集、共有を密に行い、困難を抱えた生徒に対して早期に対応し支援する。	生徒の変化に対して A 素早く対処し、解決に至った B 素早く察知し、対応することができた C 素早い対処ができず、解決が遅れた D 発見・対処が遅れた	いじめの早期発見、対処について ア よく当てはまる 60.0% イ やや当てはまる 36.4% 計 96.4% 心的支援を必要とする生徒への対応 ア よく当てはまる 49.1% イ やや当てはまる 43.6% 計 92.7%	いじめ及び心的支援を必要とする生徒への対応について、いずれも90%以上取り組んでいると評価しており、職員の情報共有や連携の体制は取れているといえる。その一方で、長期欠席の生徒、教室での居心地の悪さを感じている生徒は恒常的におり、SNSへの対応も含め、一層の情報共有と連携を図っていく必要がある。
	⑦ 各検診の結果で健康管理上、受診・治療が必要と診断された生徒に対し、個人面談を通して自己の健康課題を意識させ医療機関での受診率を高める。	各検診の結果から自己の健康管理上、受診・治療の必要性を理解し医療機関を受診した生徒の割合が A 70%以上 B 60%以上 C 50%以上 D 50%未満	項目： 受診者数／要精検者数 受診率 評価 心臓検診： 10人／11人 91% A 歯科検診： 84人／174人 48% D 視力検査： 124人／278人 45% D	生徒には個別指導、保護者には受診勧告書で医療機関への受診を勧めた。心臓検診の意識は高いものの、歯科・視力については50%以下と生徒の意識が低く受診率が高まらなかった。今後は生徒の個人面談だけでなく、保健だよりを活用し保護者の協力が得られるようにする。
	⑧ 図書館報、図書便りによる図書案内や各学年団と連携した朝読書、ビブリオバトル、一斉読書などの読書指導によって、読書に親しむ習慣を身に付けさせる。	生徒一人あたりの本校図書館の年平均貸出冊数が A 6.0冊以上 B 5.0冊以上 C 4.0冊以上 D 4.0冊未満	生徒一人あたりの本校図書館の年平均貸出冊数が 3.3冊(1月26日現在) D評価	例年通り朝読書やビブリオバトルなどに取り組み、購入図書へのリサーチや企画展示を行ったが、一人あたりの貸出冊数は3.3冊と伸び悩んだ。今年度は学年と連携した読書指導が少なかったことや図書館を利用する生徒に限られており、なかなか全体に広がらないことが原因として考えられる。
学校関係者評価委員会の評価	・前年度に比べ交通事故が多くなっていることから、自転車の乗車マナーや命を大切にすることなど安全教育・防災教育を推進してほしい。 ・野々市市の行事やボランティアに参加している生徒を表彰することはないか。			
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方策	・交通安全やネットトラブル防止など含め、命を大切にすることや安全教育や防災教育を推進する。 ・野々市市唯一の県立高校として、今後も地域との連携や発信を推進する。			